

No	提 案 名	提案団体名	
		代表者氏名	所 属
6	オリオン通り魅力向上計画	宇都宮共和大学山島ゼミ 2 年+都市アメニティ研究会	
		山中 亜由美	宇都宮共和大学 シティライフ学部
		指導教官 氏 名	山島 哲夫

1 提案の要旨

オリオン通りの名前は、オリオン座の三ツ星に由来している。オリオン通りを構成する曲師町、江野町、一条町の 3 町が輝くまちになることを目指して、戦後間もなくの昭和 22 年に命名されたものである。

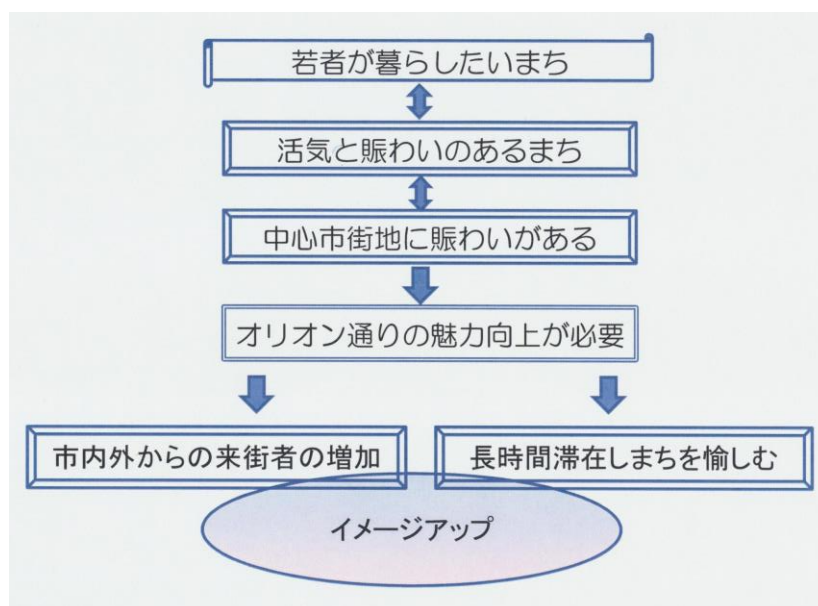
そこで本提案では、この三ツ星にちなんで、オリオン通りで展開すべき 3 つの方策を示すとともに、新たにオリオン通りのイメージソングを作詞作曲した。

オリオン通りは、かつて、県内の最大の商店街として活況を呈し、オリオン座の三ツ星のように輝くまちであったが、現在は、その面影はなく、輝いているまちとは到底言えない状況となっている。

まちに輝きを取り戻すためには、まちに多くの人が訪れるとともに、訪れた人がまちに滞在し、まちを愉しめるようになる必要がある。

オリオン通りへの来街者自体を増やすことと、来街者にできるだけ長く滞在してもらうためには、

- 1.市外や県外からの来街者を増やすこと
 - 2.宇都宮市民にも、より多くオリオン通りに来てもらうこと
 - 3.オリオン通りの来街者に、長時間滞在できる仕掛けをつくること
- が必要であり、そのための 3 方策を提案した。また、オリオン通り自体に親しみを持ってもらうことも大切であり、そのための「オリオン通りの歌」を作った。



2 提案の目標

『若者が暮らしたいまち』＝暮らしたくなるまちは、まちに活気があり賑わいがあるまちである。まちの活気は、中心市街地の賑やかさに影響されるところが大きいと考えられる。宇都宮の中心市街地に位置するオリオン通りが寂れていれば、たとえ郊外部にショッピングセンターがあっても、まち全体の賑わいにはつながらない。若者にとって、まちの中に訪れたくなる楽しい居場所があってはじめて、「住めば愉快な」暮らし続けたいまちになると考える。中心市街地に位置するオリオン通りに魅力があふれ、賑わいがあれば、宇都宮を若者が暮らし続けたいまちにすることが出来る。

まちの賑やかさは、

$(\text{来街者数}) \times (\text{平均滞在時間})$

で決まる。

単に、まちに多くの人が訪れても、自転車などで、まちを通過するだけでは意味がないだけでなく、まちの賑わいを壊すことになりかねない。まちの中に滞在し、まちなかを散策し、さらにまち自体を愉しむことが出来るようにする仕掛けが必要である。

そのため、オリオン通りへの来街者自体を増加させるために必要な方策を検討するとともに、来街者に、できるだけ長く滞在してもらうための具体的な方策について提案する。

3 現状の分析と課題

宇都宮市は2度にわたり中心市街地活性化基本計画を作成し、オリオン通りなどの中心市街地の活性化のために、様々な施策を展開してきた。中心市街地へ新たな商業者の出店促進のための措置、商店街を担う人材の育成、商店街の景観づくり、オリオンスクウェアを活用したイベントの実施など多様な事業が進められてきた。

その結果、中心市街地の歩行者・自転車通行量の減少に多少の歯止めがかかるようになり、空き店舗数も100店舗以上あったものが、近年増加傾向から減少気味に推移するようになった。しかし、通行量は昭和60年ごろの3分の1程度にとどまっており、また、中心市街地には依然として70店舗以上の空き店舗がある。オリオン通りをはじめとした中心市街地に活力があり魅力的であるとは、言えない状況にある。



(オリオン通りの様子と空き店舗)

平成25年度に宇都宮市と商工会議所が実施した「商店街通行量・来街者実態調査」では、オリオン通りの来街者の59%が市内で、市外からは29%、県外から12%となっており、市外からもある程度来街者が来ていることが分かる。また、オリオンスクウェア前の通行量は休日に1万1千人以上で、通行量自体は決して少なくはない。しかし、これらの来街者が、オリオン通り自体を目的に訪れているかは定かではない。宇都宮市民を対象に実施したアンケート調査（平成25年度）では、中心市街地の平均滞在時間は2～3時間が多く、若い世代

ほど滞在時間が長いという結果も出ている。この、滞在時間についても、まちを賑やかにするような活動（まちを散策したり、まちを愉しんだりする活動）であるとは断言できない。オリオン通りの現状を見ると、必ずしもこうした数字が、まちに賑やかさをもたらしめているとは言えないようである。しかし、オリオン通りを訪れる来街者自体は、かなり多いこと、まちなかにとどまっている時間もそれほど短くないことは、オリオン通りの活性化にとって、考慮すべき点であると思われる。

同じ調査では、重要度が高く、満足度も高い（継続が必要な）取組として「イベントによるにぎわいづくり」「イベント広場の活用」などが挙げられ、重要度が高いが満足度が低い取組として「商店街の魅力向上」「再開発事業」「魅力ある景観づくり」「公共交通の利用促進」が挙げられている。商店街のまちとしての魅力を高めることが求められるとともに、まちなかで行われるイベントをより充実することが必要と考えられている。

オリオン通りの魅力を向上し、多くの人々が愉しめる場所とするためには、これまでの施策に加えて、多くの人を呼び寄せるとともに、まちを愉しみながら散策し長く滞在させるという観点から、より効果的な施策が必要と考える。

また、まちの魅力を向上させるためには、オリオン通りのイメージアップを図ることも大切であると考え。そこで、私たちは、若者が歌いやすく、商店街の BGM としても流せ、人々が口ずさむことの出来る新しい歌を作ることとした。

4 施策事業の提案

人が集まるのは、そこに行くとうれしいからであり、何か新しい発見があるからであり、そこにいと居心地が良いからである。

オリオン通りに多くの人々が訪れ、まちを愉しめる居心地の良い場所とするために、

1. 伝統工芸品等の体験型工房を各市と連携してオリオン通りに設置

これにより、市内だけではなく、市外や県外からの来街者を増加させることが出来る。また、実際に体験することにより、伝統工芸に対する認識を深めるとともに、まちなかに長時間滞在することにも寄与する。

2. オリオンスクウェアの整備と活用

整備されたオリオンスクウェアを活用して多様なイベントを実施することにより、宇都宮市民が度々オリオン通りに訪れるようにできる

3. 釜川を活用したオープンカフェの開設

オリオン通りに訪れた人がゆっくりとお茶を楽しみながら時間を過ごせる場所を提供できる。

の3つの施策を提案する。

1. 伝統工芸品等の体験型工房

栃木県内には日光などの世界的な観光地も多く、また、益子焼をはじめとした日本を代表する優れた伝統工芸品が数多く存在しているが、これらが同じ県内であるという認識が薄く、栃木県のブランドイメージは決して高くない。これは、県都である宇都宮市と、これらの地域の相互の連携が取れておらず、日光は日光、那須は那須、益子は益子とそれぞれの地域がバラバラに存在しているように認識されているためと考えられる。

また、伝統工芸品の体験は、各市・地域で常に行われているが、体験談や評価の数自体が少なくあまり知られていないものもある。県都である宇都宮市の、さらに中心街であるオリオン通りに工房を設けることにより、様々な伝統工芸品の知名度が上昇し、すでに有名なものについてもより深く知ってもらうことにつながる。伝統工芸品の体験に併せて各市の観光情報などの提供も行うことが出来る。

県都である宇都宮市内に栃木県内の観光情報と伝統工芸品に関する情報をまとめて取得で

きる場所を設けることは、従来バラバラに認識されていた栃木県の観光と伝統工芸を結びつけ、県全体の観光振興に有効と考えられる。これにより、新たな来街者を増やす（市外、県外も含む）ことが出来る。また、体験型の工房とすることにより滞在時間を長くすることも可能である。

現在、観光の主流は、従来のマストツーリズムから、個人を主体とした、着地型・体験型の観光へシフトしているといわれている。単に、物見遊山的に観光地を訪れるのではなく、現地で実際に様々な体験をすることが求められている。

県都である、宇都宮で、県内の様々な情報や物品に直接触れることにより、そこから、実際の現地へと誘うこともでき、宇都宮市のイメージアップにとどまらず、県全体のブランドイメージの向上にも資すると考えられる。

伝統工芸品としては、益子焼（益子町）、小砂金焼（那珂川町）、みかも焼（栃木市）、日光彫・日光下駄（日光市）、烏山和紙（那須烏山市）、真岡木綿（真岡市）、結城紬（小山市）、行庵手織（草木染 足利市）、鹿沼組子（鹿沼市）など数多くの工芸品があり、宇都宮にも宮染めばある。これらの都市と連携して、オリオン通りの空き店舗内に、体験型の工房を設け、観光客が実際に体験作業できるようにする。焼き物などは、工房で作ったものを、現地で完成させ、後で発送なり受け取りなどができるようにする。

空き店舗は、東武宇都宮駅から1つ目の大きなブロックにあるオリオンACぷらざ周辺にいくつか存在しており、これらの施設を使い、それぞれの施設に特徴を持たせ、各市と協力しながら、伝統工芸品の実体験できる工房等を出店してもらうという方法が現実的である。



（オリオンACぷらざとその周りの空き施設）

私たちは、那須の「ガラス工芸」、那珂川町の「小砂焼」、益子の「益子焼」、日光の「日光彫り」、「湯葉引き上げ」、真岡の「真岡木綿」、小山の「結城紬」、那須烏山の「烏山和紙」などについて体験型工房をつくることを提案する。できるだけ多種類の体験型工房を用意することで来街者の選択肢は増え、様々な時間の使い方が可能になるだろう。さらに、「あれもやりたいからまた来よう」と次回にもつながると考えられる。



(栃木県伝統工芸品展 (2015 年 10 月 24・25 日於県庁))

現在ギャラリーとして商店街が管理運営しているオリオン AC ぷらざとその周辺にある 3 か所の空き施設を利用する。この 4 施設は一か所に集中していて、来街者が待ち合わせ場所として使うこともでき、友人同士で違う工房で体験をしてもはぐれないという利点もある。

具体的なイメージの例として、落合書店があった施設では、日光彫りや鹿沼組子などの工房を設ける。木材を扱うので、他の工房とは分ける。AC ぷらざの 1 階は 2 階にある「はなむすび」という店が、主として高齢者を対象としているので、AC ぷらざの空いている時は 1 階を真岡木綿と結城紬の機織り体験ができる場とする。3 番目の施設は広いので、益子焼と小砂焼の工房をまとめ、さらに烏山和紙の紙漉き体験もできるようにする。焼き物は、ロクロや絵付けなどを体験できるようにする。小砂金焼の知名度は栃木県内では決して高いとは言えないが、味わいのある焼き物であり、益子焼と同じ場所に設けることで知名度は数段上がると考える。4 番目の施設は、日光の湯葉の引き上げと県内各地で行われているソバ打ち体験の工房とする。食は非常に有効な集客手段であり、伝統的な食に関する体験も、伝統工芸品の体験と併せてできるようにすることが効果的と考えられる。なお食品の扱いはこの店舗のみにしぼり、衛生面に配慮する。

他にも空き店舗が出れば、例えば、ヒュージングやエッチング、吹きガラスなど県内各地で行われているガラス工芸の工房とする。風鈴など季節に合わせ飾りつけることで、こんなガラス工芸が自分で作れるというアピールもでき、見た目にも華やかになる。

2. オリオンスクエアの活用

まちに人が集まってくるためには、楽しく集まれる場所が必要である。富山市のグランドプラザや長岡市のアオーレ長岡などでは全天候型の広場がまちなかの一等地にあり、多くのイベントが行われ、常に人が集まる場所となっている。宇都宮市には、オリオンスクウェアがありイベントなどが開催されている。しかし、オリオンスクウェアは全天候型になっておらず、イベントも限られてしまう。そこで、オリオンスクウェアを全天候型に改修してオリオン通りのアーケードと接続させることにより、オリオン通りのアーケード街とを一体の広

場空間とすることを提案する。まとまった広場と線状のアーケード街が一体となった非常にユニークなイベント広場をつくる事が出来る。

これにより、グランドプラザやアオーレ長岡などとも面積的に十分対抗できるだけでなく、商店街と共同で様々な使い方のできる広場となる。天候に関わらずイベントを通年開催することにより、多くの市民がオリオン通りを訪れることになり、また、まちの滞在時間も長くすることが出来る。

アオーレ長岡もグランドプラザも常に様々なイベントが行われ、人々で賑わっている。市内の市民団体、学校、企業、行政まで、いろいろな団体が活用している。一例として 2015 年 11 月のアオーレ長岡のイベントカレンダーから、10 日から 15 日までに行われたイベントを見ると、

11 月 10 日「長岡産バクバクマルシェ」「社員が輝く“職場の祭典”」

11 月 11 日「川柳句の展示」「不動産相談会」「年金相談会」

11 月 14 日「ピラティスワークショップ」「アオーレで知ろーれ糖尿病」「着物着付け教室」

11 月 15 日「長岡うまい米コンテスト 2015」

などとなっており、食から医療まで幅広いイベントが行われていることが分かる。

これらの施設が有効に利用されている理由として、立地の良さ、施設の規模に加え、全天候型で天候に左右されずにイベントを計画出来る点にある。

オリオンスクエアを全天候型にできれば、商店街のアーケードに接続しているという利点を活かしアーケードとの一体的な活用や商店街と一体となったイベント実施が可能となる。

具体的なイベントの例としては、B-1 グルメなど料理に関するイベント開催や、曜日を決めて栃木の新鮮な食材を提供する朝市の開催など、食に関するイベントをはじめ、音楽のライブ演奏からスポーツの大会までありとあらゆるイベントが考えられる。



(オリオンスクウェアは全天候型になっていない)



(アオーレ長岡 なかどま)



(富山 グランドプラザ)

まちなかの便利なところに、天候に左右されずにイベントを計画できる場所があれば、イベントは自ずから集中するようになり、新たなイベントも数多く企画されるようになる。要は、使い勝手がよく、市民が行きやすい場所にイベントに適した施設があるか否かである。

オリオンスクウェアを全天候型に改修するためには、オリオン通り側から既存のオリオンスクウェアの屋根と同じような構造のものを既存屋根と独立させて設置する方法などが考えられる。屋根のデザインについて幅広くアイデアを募り、宇都宮市のシンボルとなるデザインとすることも考慮すべきである（多額の費用が掛からないことは当然の前提であるが）。



「とちぎ食と農のふれあいフェア」（2015年10月24日・25日）
この両日は天気が良かったことも幸いし大勢の人で賑わった

《食をテーマとしたイベントの例》

○オリオンスクウェアを活用した朝市

栃木県にはイチゴや干瓢をはじめ、ニラなど多くの農産物が生産されている。それらの農産物をオリオンスクウェアで曜日を決めて農産物朝市として販売する。

こうした朝市として有名なのが石川県の輪島市の「輪島朝市」、高知の「日曜市」などがある。輪島朝市は、千年も前から続けられているという。これらの朝市が行われている場所は全天候型にはなっていないが人とコミュニケーションをとるための工夫がされている。例えば、輪島朝市では、販売する全ての品に事前に値段を付けるのではなく値段は買いに来る客と直接交渉する仕組みを導入している。こうすることにより自然と会話が発生しコミュニケーションが生まれるのである。朝市は、購入者と販売者が直接触れ合うことができ、ショッピングセンターなどでは味わえないコミュニケーションの楽しさを体験できる場にすることが出来る。また、ただ農産物を売るのではなく買ってもらった食材を使用した簡単なレシピを教えるサービスも取り入れたい。そうすることでさらに会話が弾み、コミュニケーションが生まれると実際の役にもたち、多くの来街者を呼び込むことにつながる。



（輪島の朝市の様子）

○「北関東 B-1 グランプリ」の開催

栃木県を中心に北関東の三県は、オリオン座の三ツ星を表すと考え食のイベントの一つとして取り上げる。このB-1グランプリでは主に各県の伝統料理で開催することが好ましい。これにより、北関東三県の繋がりを強化できるとともに、郷土の伝統料理の発掘と振興、知名度アップにつながると考えられる。

オリオンスクエアを全天候型にすることにより、雨・暑さを気にせずに買い物ができ、農産物などの食品の中には暑さに弱いものもあるのでその点も有利になると思われる。

3. 釜川を活用したオープンカフェ

オープンカフェは、来街者の滞在時間を長くする効果があり、居心地の良いオープンカフェの存在は多くのリピーターを呼び込むことが出来る。オープンカフェの場所は、景観や周囲の雰囲気が大切である。成功しているオープンカフェの多くは、風景の良い河川沿いや、人々の往来をゆっくり眺められる街路沿いに設けられている。オープンカフェは、単に人と会話を楽しむだけのところではなく、まちの風景や人通りを眺める場所でもある。オリオン通りには、オリオン通りを横切り並行している流れる釜川がという素晴らしい河川が存在している。この釜川沿いにオープンカフェを開設し、ゆっくりと滞在してもらえようとする。

広島市の市街地東部を流れる河川「京橋川」に設置されたオープンカフェは、河岸緑地に民間事業者が営業する飲食店、カフェを常設したものであり、水辺を都市の資源として、新たな魅力作りに活用したものである。当初の年間目標は37千人であったが、開業1年間で73千人が訪れたといわれている。天候や季節により左右される面はあるが、魅力的なオープンカフェには多くの人が訪れると思われる。



(広島京橋川のオープンカフェ)



(東京表参道のオープンカフェ)

今回私たちが、釜川沿いにオープンカフェを設置することがいいと考えた理由は、若者をはじめ大人の来街者を含めて、まちの滞在時間を長くする効果があるからである。居心地の良い場所は、周囲の雰囲気が大切である。クルマが通らず排気ガスや騒音もなく、しかも川辺の景色を楽しみながら、落ち着いていられる場所として釜川沿いが最適であると考えた。昼間の喫茶空間としてだけでなく、朝食からディナーまで、幅広く利用できるようにしたい。釜川沿いをオリオン通りと一体のものとして活用することにより、買い物とイベントの空間であるオリオン通りと、落ち着いた雰囲気で、ゆっくり散策できる釜川沿いの複合効果により、オリオン通りがより魅力的な場所となると思われる。

現在、釜川沿いに設けられているベンチは、2007年度の「まちづくり提案」における宇都宮共和大学都市・アメニティ研究会の提案に基づいて設置されたものであり、ゆっくりくつろげるものとなっている。このベンチを活用して、パラソルとテーブルを置くことにより、オープンカフェとすることが出来る。また、このベンチの側にある釜川をまたぐ橋にはオシャレな休憩所が設けられている。この休憩所の上部は格子状のモニュメントがあるが、雨を防げる構造になっている。

ない。ここに雨を防げる改修することにより、ベンチの部分と橋の休憩所の部分が一体となったカフェとすることが出来る。多くの人を引き寄せるためには、外にあるパラソルの色や柄を工夫して洒落た雰囲気になるよう工夫が必要である。休憩所の上部にはカラフルなガラスを貼ることも効果があると考ええる。



(釜川沿いのオープンカフェのイメージ)

オリオン通りの活性化のためには、まちに多くの人が訪れ、来街者がまちを愉しみながら長時間滞在できるようにすることが必要である。ここで取り上げた3つの施策（オリオン通りの輝ける3つ星）はそのための効果的な方策であると考ええる。

ここで取り上げた施策以外にもまちを活性化するための方策はあると思われるが、活性化のための方策は「オリオン通りに多くの来街者を呼び込むこと」と「来街者が長時間愉しめること」の2つの視点は欠かすことが出来ないと考える。中心市街地の活性化は、単に中心市街地だけの問題ではなく、まち全体の活性化に大きく影響する問題である。まちに活力があり賑わいがあったはじめて、人はそこに暮らしたいと思うようになる。

「若者が暮らしたいまちは、まち（中心市街地）に賑わいと活力があるまちである」

楽しいまちにするためには、まちのイメージも極めて重要な要素になる。ここに挙げた3つの施策により、まちへの来街者を増加させるとともに、まち自体のイメージの向上を図ることに留意する必要がある。そのため、私たちは、明るく親しみのもてるオリオン通りのイメージソングを作り、まちのイメージアップを図ることとした。

若者にも親しみやすいメロディーで、気軽に口ずさんでもらえ、商店街のBGMとしても使えるような歌にすることに留意した。次ページに「オリオン通りの歌」を掲載した。

オリオン通りの歌

作詞・作曲

伊藤 遼太郎（＊）

住めば愉快的この街歩く
軽快な足取りで
行先は決まっていない
そうだオリオン通りへ行こう

G/D/Em/Bm
C/D/G/Em
C/D/G

華やかな場所 賑やかな人
人波を抜けていけば
その中で君の笑顔と
僕の笑顔を見つけた

G/D/Em/Bm
C/D/G/Em
C/D/G

オリオン通り オリオン通り
楽しさが詰まっている
この場所は優しさに包まれ
自然と笑顔になれるさ

G/D/Em/Bm
C/D/G/D/Em
C/D/G

住めば愉快的 宇都宮にある
僕らのオリオン通り
行先はどこでもいいや
そうさ ここにいるだけで楽しい

G/D/Em/Bm
C/D/G/D/Em
C/D/G

オリオン通り オリオン通り
夕日が差し込んでいる
この景色懐かしさに包まれ
穏やかな気持ちになれた

G/D/Em/Bm
C/D/G/D/Em
C/D/G

オリオン通り オリオン通り
オリオン通り
この場所で笑顔になれるさ
行先は決まった
軽快な足取りで
そうさオリオン通りへ 行こう

G/D/Em/Bm
C/D/G/D/Em
C/D
C/D
C/D/G

（＊）宇都宮共和大学シティライフ学部４年